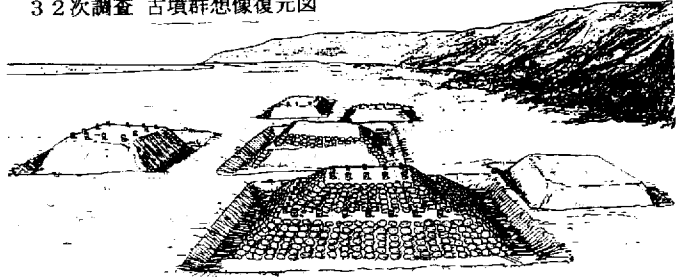


住吉宮町古墳群 (神戸市東灘区)

馬が殉葬された32次調査1号墳



寺岡 洋

住吉宮町遺跡

ホームからではどうてい想像できないが、JR住吉駅は古墳群の真っ只中につくられた駅である。6世紀前後、駅周辺は累々と古墳が広がる風景がみられたであろう。

図が小さすぎて見にくいが、「住吉宮町古墳群全体図」を見て下さい。中央を東西に横切るのがJR神戸線で、輪郭をはっきりしないが斜めに国道2号線が通過し、右上に住吉駅。中央のぽっかりと白いところには本住吉神社が鎮まっている。

黒丸が調査番号、太い線で囲んだ個所が調査した場所になる。枠のなかとうっすらと見えるのが調査された古墳で、殆どが方墳（墳丘が四角形）である。駅周辺と本住吉神社を挟んだ西側に群集している。

駅北側には全長推定57mの坊ヶ塚古墳、南側に全長23mの帆立貝式古墳の住吉東古墳（コープ駐車場）が存在し、この二つの古墳が墳形・大きさから盟主墳とされる。

駅周辺は古墳時代の遺跡だけではなく、弥生時代から室町時代の遺跡が重なっている。とくに、奈良・平安時代の遺構・遺物は官衙（役所）からの出土例が多く、菟原郡衙（うばらぐんが）に関連する施設が存在したと推定されている。古代山陽道も通過しているはずだが、現在まで道の痕跡は検出されていない。

住吉宮町古墳群

古墳群は住吉川の扇状地に立地し、海拔20～30m。住吉川は谷崎潤一郎の「細雪」の洪水で知られるようにしばしば氾濫をおこしている。古墳群も6世紀初頭前後、大洪水に

襲われ分厚い洪水砂で覆われたことにより、墳丘の下半部や周溝（古墳の周りに掘られた溝）が現代まで保存され、都市市街地の地下から古墳群が出現することになった。

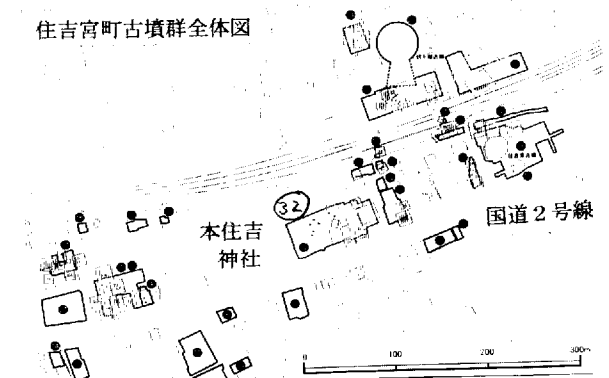
古墳群の範囲は東西600m、南北250mと推定され、国道2号線より南側で古墳は見つかっていない。

報告書『住吉宮町遺跡 第24次・第32次発掘調査報告書』神戸市教委2001)によれば、住吉宮町古墳群ではこれまでに71基の古墳が調査され、うち67基が方墳とされる。古墳の規模は大部分が周溝を巡らした一辺2～17m程度と小規模で、20mを越すものは1基のようである。箱式石棺墓も相当数出土しているようで、階層の異なる被葬者の存在が推定されている。

住吉宮町古墳群の外見上の特徴は、5世紀半ばから6世紀という比較的早い時期に、平地に、方墳が墳丘を接するように密集して築造されている点にある。あまり類例のみられない特異な古墳群であることから、古墳群を築造した集団の出自に注目されていた。

西側に隣接する郡家遺跡（阪急御影駅南一

住吉宮町古墳群全体図



帯)は、オンドル状遺構(L字形カマド)や初期須恵器の出土から有力な渡来系集団の集落と推定されており、住吉宮町古墳群はその墓域ではないか、あるいは、小型の方墳が平地に群集することなどが長原古墳群(大阪市平野区)と類似しており、この点からも渡来系集団の墳墓群である可能性が推測されていた。ただ、渡来系集団とみなせる出土遺物がみられず、今回、極めつきの遺物(馬歯)が出土したので紹介したい。

3 2 次調査1号墳(3 2-1号墳)

表題横の図は今回紹介する3 2次調査で確認された古墳の一部を復元したもので、すべて方墳が描かれている。駅周辺にこのような古墳が数十基群集していたのである。調査地は本住吉神社の東隣りになる。

1号墳はいちばん手前で周溝に囲まれ、墳丘は二段に造られ、墳丘の表面を保護する葺石(ふきいし)があり、埴輪が墳頂と墳丘中段平坦面に巡らされている。

規模はおよそ一辺14m、墳丘の高さは下段約70cm、上段の残存高が約70cmで、復元図のイメージよりだいぶ低墳丘である。

古墳は築造からあまり時間を置かず洪水によって埋没しており、また、墳丘には地震による地割れ・地滑り・噴砂がみられる。

主体部(被葬者を葬った場所)は残念なことに後世の削平により残っていなかった。

出土遺物は西側周溝の最下層から初期須恵器のハソウ・樽形ハソウが各1点、土師器の高杯・杯、滑石製紡錘車などが出土し、何らかの祭祀が行われたと想像されている。

樽形ハソウは一見して古そうで、焼成された窯跡がどこか気になる場所である。

1号墳の築造年代は、出土した須恵器の型式(TK208)から5世紀中葉とされる。

馬歯骨の出土

北辺周溝の中央付近、周溝底から約5cm浮いた地点から一頭分の馬歯および下顎骨の残欠が出土した。「出土層位は黒褐色シルト層

奈良井遺跡 祭祀想像図



で、築造後、最初の周溝埋土であることから、古墳完成とほぼ時を同じくして置かれたもの」と考えられている。

住吉宮町古墳群での馬歯(馬首を切り取って置いたのである)の出土は初めてであり、出土層位は馬歯が後世の混入でないかどうかを確認するため非常に重要な要素になる。「古墳の完成とほぼ時を同じくして置かれた」ものであれば、古墳の被葬者のための祭祀行為の一環として行われたと推測することができるからである。

今回出土した馬歯について、「全ての馬歯は永久歯であり、咬耗の進行が少なく、換歯が完了して間もない個体と考えられるため、3~4才の若年馬と推定され、それも牝馬の可能性が高い」とされる。5世紀の中頃、馬そのものがステータスシンボルであるが、若い牝馬は繁殖のため飛びきり貴重である。

馬体の大きさも馬歯の計測値から推定されており、「体高(肩の高さ)約120~140cmの中型馬で、現存種の本曾馬・御崎馬に近く、在来馬の中では大型の部類に入る」そうである。

馬の殉葬・殉殺について

古墳祭祀あるいはその他の祭祀に馬を殺すこと(殉殺)の意味や、そのような習俗をもつ集団については、多くの発掘例がある四条畷・寝屋川などの遺跡(北河内の馬飼集団)や、長原古墳群の発掘例と合わせて、後日、紹介したい。

上のイラストは奈良井遺跡(四条畷市)で馬の首を切り落としている様子。敷物右端には樽形ハソウがおかれている。